
世界は馬鹿中心で回ってる

大根鮎里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界は馬鹿中心で回ってる

【Nコード】

N6890Y

【作者名】

大根鮎里

【あらすじ】

とりあえず馬鹿しかいない。

バナナの皮で滑って生涯終えたコンビニ店員。

鍋以外は盲目で鍋の事しか考えていない美人高校生。

顔立ちは整ってるくせに性格がちよっと生意気なのであんまりモテないイケメン新米刑事。

その新米刑事の上司で、推理力が抜群の冷静沈着＋顔も性格もパーフェクトな憎たらしい奴。

さて、この馬鹿たち（一部頭いい奴もいるけども…）が力を合わせ
てある事件を解決しようとするのだけど…

刑事は幽霊と付き合つぐらいの度胸が必要

信号が赤から青に変わった。

車のアクセルを勢いよく踏む。ハンドルを回して横断歩道を横切り、L字カーブになっている道を抜けた。急ぎ足で事故現場に向かう。

結局、現場に辿りついたのは午前6時52分。事件発生から約六時間も経過していた。

そのコンビニはにぎわっている商店街の外れにあつた。ぽつんと置き去りにされたように建ててある。冷たい風が体を覆った。駐車場にパトカーが三台、停まってある。周りには『関係者以外立ち入り禁止』のロープが張られていた。そのすぐ傍には無表情の警備員が二人。彼らに軽く会釈してからそのロープをくぐった。

店内は思っていたよりも狭く、暗かつた。不穏な空気を漂わせている。それとは対照的にいつもと変わりなく規則的に並べられている商品は気味が悪い。以前から検死写真で死体を見慣れてしまった自分自身に嫌悪感を抱いていたからなのだろうか、まるで、自分とは無関係の人間が一人死んだとしても他人事でしかないように、お前が死んでもこの世界は動き続けるのだ、と指摘されているような気分になつた。

先程までいた遺体の血生臭いにおいが鼻をつく。検証用カメラのシッター音が耳に入ってくる。これも、もう見慣れた光景だつた。

警視庁刑事部捜査一課強行犯捜査三係の警部補である沖野潤也おきのじゅんやはこちらを見て思わず顔をしかめた。

「……甲斐さん、遅えよ」

甲斐かいと呼ばれたこの男 同様に警視庁刑事部捜査一課強行犯捜査

三係の警部 は、ふくれっ面の沖野を見てほんの少し顔が和らいだ。
「ああ、悪い。ひつたくり犯を逮捕するのに手間取ってたんだ」

そう答えれば、納得がいかなくなったのか、ふくれっ面のまま沖野は言った。

「そんなの問答無用！とりあえず甲斐さんに聞きてえ事あんだけど。」

沖野は性格が少々ひねくれているとはいえ、顔立ちはかなり整っていた。捜査一課のアイドル的存在である。見た目は十代後半か二十前半。中身は三十代くらいのベテラン刑事。茶髪に天然パーマという髪型をしているため、刑事だと一発で見抜ける人間はそうそういない。そんな身なりでも、新人の割には推理力に優れていた。半年前に起こったあの銀行強盗事件を解決するなど驚くほどの活躍ぶりだ。祖父が警視總監で、七光で押し上がった最低な奴だと罵る奴もいるそうだが本人はあまり気にしていないようだ。ちなみに警視總監は「警察官の階級」でいうと最高位である。

「なんで警察がわざわざこんなことしなくちゃいけないんだよ？ただ、コンビ二強盗が入っただけだ。犯人も捕まったし、金も無事、押収した。見事、解決したんじゃないのかよ？」

沖野の声にはいつもより棘があった。よほど機嫌が悪いのだろう。

「……なんだ？お前、せつかくの休暇が台無しにされて怒っているのか」

そう指摘してやれば、案の定、沖野は言葉を詰まらせる。

「……うっ」

「凶星か」

「だって俺、今日、非番なのに岡崎刑事が入院したから代わられて言われてさ。…子供ってのは遊ばねえと人生楽しめねえのに…。それに俺は叱られて伸びるタイプじゃねえ！褒められて伸びるタイプだ！」

本当にこいつ警察か？世の中の治安をこいつが守れるとは思えない。「お前はもう子供じゃないだろう。それに野球なんていつでもでき

る」

静かに沖野の発言に訂正を入れる。だが、沖野は気にすることなくむしろ開き直った。

「確かにもう二十歳越えてるけど心はいつでもあの頃の少年のままなんだよ！それに今すぐ野球してえんだよ！」

「知らないな。…まあそこまで言うなら野球してやってもいいぞ。

そこにあるお前の腕をバッド代わりにしてな。ほら、さっさと腕を出せ。骨折るから。そしてお前という球を見事に打ち砕いてやるから。」

「すみませんでした」

沖野は青白い顔をしながらスライディング土下座をする。

「で沖野、さっき俺に聞いたな。なぜ俺たちがわざわざこのコンビニを調べなくちゃいけないのか。」

甲斐は手袋をはめ、黙々と証拠を探している。その脇では沖野が小さめの手帳を片手にペンでなにやら書き込んでいた。

「……ああ。」

沖野は突然、声をかけられ、驚いたのか少々声の上擦った。甲斐は気にすることなく話を続ける。

「ここで今回の事件で死人が出た。それは知っているな？」

沖野は軽く頷いた後、すぐさま手帳のページをめくり、朗読し始めた。

「ああ。…亡くなったのは青山佐代子あおやま しろよ十六歳。都内の私立高校に通っていた。校則でアルバイトが禁止されているのにも関わらずコンビニでバイトしていた。それを知っていたのは親友である鍋田鍋子なべたなべこのみ。両親さえ知らなかったらしいぜ？性格は活発で明るく、少なくとも誰かに嫌われるような奴じゃなかった。と同じ高校に通う奴らは供述してる。で、その被害者の女がどうしたんだよ？」

沖野は、顔をあげ、まったく意味が分からない、という様子で訊ねる。すると甲斐は、大げさにため息をついた。

「…死因は何か知ってるか」

「……バナナの皮で滑って転んだ。……打ち所が悪く大量出血。」
沖野は顔を歪めながらいった。バナナの皮で滑るなどこの子は運が悪すぎた。沖野はそう不憫に思ったのだろう。

「ああ。…最近、中国で流行っているらしい。」

甲斐は相変わらず冷めた声で言った。

「は？」

沖野から間の抜けたような声が出た。

「わざとバナナの皮で転ばすんだ。わざわざ滑りやすいように皮を加工してな。あまり実感が湧かないかもしれないがこれは笑い話じゃないぞ。現に被害にあった者は皆死んでいるんだ。」

「そんなバナナ！」

そう叫んだ沖野を頬を思いつきり抓る。沖野は小さく呻き声を上げる。甲斐は気にする事なく、酷く冷たい声で言った。

「いいか。もう一度言うぞ、沖野。これは事件だ。笑い事じゃない。死人が出ている。…なら俺達の役目は分かっているな？」

甲斐は真剣な目で沖野を見つめる。

「……わりい。調子に乗りすぎた。」

素直に頭を下げた沖野を見て甲斐は小さく頷く。

「事の重大性を理解できたならいい。さっさと調査を進めるぞ」

「了解！」

捜査が一通り終わったところで、ふいに甲斐が口を開き、こう言った。

「…ところで沖野。あれが見えるか？」

沖野は甲斐が指さした方向を見る。そこには一人の若い女性が天井にへばりついていて。なぜ、今まで気がつかなかったのだろう。

「……見える。」

沖野はそう答えた。

というかなんなんだアレ。怪しすぎるだろ。

よくよく観察してみると、大きく二重まぶたの目。肩までの長さの薄い栗色の髪と白い肌。なかなか可愛らしい顔立ちをしている（ただ、今の状況から見ればどんなに可愛くてもホラー以外のなんでもない）。そして沖野自身、その女の顔には見覚えがあったのだが、いつどこで出会ったのかまでは記憶に残っていない。

「……そうか。見えるか。ちなみに、その鑑識の奴にさっきのと同じ質問を投げかけてみたんだが「見えない」と答えたんだ。……どうやら今、この現場にいる人間の中で靈感があるのは俺達二人だけのようだな。」

淡々とした口調で甲斐は言う。その後ろでは壁にへばりついたまま、女がこちらをじっと見つめている。怖い。怖すぎる。この前観たホラー映画よりも怖い。

「……ちよつと待つて。え、あれ、じゃあ幽霊？」

沖野がそう訊ねれば、甲斐はその整った顔を崩すことなく答える。

「ああ。ほら、その証拠に彼女の顔をよく見てみる。見覚えがないか？俺には今回のバナナ事件で殺害された被害者に見えるんだが。」

……。確かに。言われてみればそんな気がしなくてもない。沖野は震える手でおそろおそろ手帳のページをめくり、はさんであった今回の事件を被害者の写真を確認してみる。……。ああ、そっくりだ。

というかこれは同一人物じゃないか。首筋にある黒子の位置まで正確に一致している。

「……でも双子の可能性だつてあるだろ？」

意地でも認めたくなくてつい、そう言い返してしまった。沖野はこういった怪奇現象といった部類のものが実は苦手なのだ。

「……それはありえないな。彼女の家族構成は父・母・弟の四人兄弟だ。双子なんていない。沖野。いい加減、現実を受け止める。俺達は警察なんだ。第一、もし普通の人間だというのはならどうやってあんな高さの天井にへばりついたんだ？」

「そりゃあ脚立とか使えばいいんじゃない？現に、このコンビニには

脚立が常に置いてあったみてえだし。」

平静を装いながら反論する。なんでもいいからとりあえず真実を受け止めたくなかった。幽霊？いや、べつ別に怖いわけじゃないからな！

「だとしてもこの長時間、壁にへばりつけるか？彼女は女子高生だぞ？そんな体力があるとは思えないな」

完全敗北。

甲斐の言うとおりだ。彼女は運動部でもなければ、特別、腕の筋肉が発達しているわけでもない。

ふと、女の方に目をやると、先程と変わらぬ姿勢でこちらを見ている。無表情で。……少しでもいいから笑ってくれ。そうじゃないと怖いから。もう、足とか肩とかビクビクして震えてるから。

「で、沖野。頼みがある。」

甲斐はそう言つて、逃げようとしている沖野の肩をつかむ。

「……甲斐さんの頼みつて大抵が命のリスクがあるもんばっかだろ！」

沖野は必死に甲斐の手を振り払おうとするが、無駄だった。甲斐は口端を吊り上げ、

「大丈夫だ。簡単な事さ。俺を信用しろ。」

と言い出す。

無理無理！信じられるか！今まで、そのおかげで散々な目にあっただぞ！

沖野は心の中で叫んでいたが、甲斐は仮にも上司だ。逆らえるわけがない。

「…用件を」

沖野はあからさまに嫌そうな顔をしながらしぶしぶ訊ねる。

「あの幽霊を重要参考人として連れて行くことと思う。」

甲斐は普段と変わらぬ口調で答える。

「それはそれは大胆な発想だな…って、え？」

もう、沖野の顔は真っ青だ。

「沖野。そこでお前の出番だ。あの幽霊を説得して署まで連行しろ」
冗談を言っているようには見えない。どうやら本気のようにだ。

「何で俺が！甲斐さんがやればいいだろ！」

「何を言っているんだ。戸惑っているお前の姿を見るのが面白いんだろ」

まさかのドS発言にどういったリアクションをすればいいのか沖野戸惑っている隙に、甲斐は「じゃあ頼んだぞ」と言って沖野の肩を叩いて去っていく。一人、残された沖野は、その幽霊の女と向かい合う。緊迫した空気が流れた。無音の中、沖野は首を掻きながらちらりと女の方を見してみる。やはり居る。幻ではなかった。淡い期待を抱いた自分が愚かに思えた。

この狭い店内の中で二人だけ。よくある少女漫画的に言えばこれが恋のきっかけとかになるのだろうか、確かに、これもある意味、ドキドキのシチュエーションかもしれない。ただ、そこに芽生えるのが恋なのか、恐怖感なのか、それだけの違いである。

5分が経過した。女は何の反応も示さない。沖野を黙って見つめ続けているだけだ。

「えーあつあのうー俺、刑事の沖野って言うんですけども……。」「
試しに声をかけてみるが反応はない。

やべえよ！どうすんだよ！俺、呪い殺されんじやないかな！

沖野がとうとう死の覚悟まで決めた途端、女の赤い唇が開いた。

「……ねえ、あたしさ、まだ今週のジャプの新刊読んでないんだよね。だから買ってきてくれない？」

思わず、沖野の顔は固まったが、五分くらい経つてようやく状況を理解した。女が喋ったのだ。いつの間にか女は沖野の前に立って両手を合わせてウィンクしている。あまりにもKYな発言をしたものだから怒る気にもなれず、それどころか呆れてしまった沖野。とりあえず、言われた通りに駅前のコンビニで漫画雑誌を買ってきた。

かかった時間は約2、3分程度。女の前でビニール袋をかざせば目を輝かせて嬉しそうに笑った。不覚にも可愛いなんて思った自分が許せない。

「ん？ああ警察署行くの？別にいいよ」

あつさりと承諾した女（彼女と会話して分かったことだが彼女はどうやら青山佐代子本人らしい）を連れてコンビニを出る。駐車場に停まっている捜査車両のそばで片手を挙げ、こちらを見ている甲斐。

「どうやら無事、いけたみたいだな」

甲斐はそう言いながら、車のドアを開け、運転席に座る。助手席には沖野。そして後部座席には青山。

ここから署まで軽く一時間程度かかるのでその間に青山に事件当日のことを話してもらった。

*

事件当日

深夜一時。この時間なら大抵の店はシャッターを閉め、閉店している。辺りは薄暗く、道路脇にある二十四時間営業のコンビニエンスストアからこぼれた光だけが街を照らしていた。生憎、街灯は壊れて点かないようだ。

その深夜のコンビニのレジのカウンターに青山佐代子はいた。頬杖をつきながら店にある漫画雑誌をペラペラ興味なさそうにめくる。

「暇だ……」

ぼつりと小声で呟いた。

元々、この辺りは人通りが少なかった。1か月前にアルバイトとして働き始めたのだが、まさかこんなにも客が来ないとは。一応、言っておくが、これは客が少なすぎて赤字だとかそんな意味ではない。そもそも、誰一人、このコンビニを訪れる者がいないのだ。佐代子が勤務期中に客が来た事も一度もなく、未だにレジ打ちさえし

た事がない。佐代子は驚くどころか呆れ果て、ただ、レジの前に立つただけで給料をもらってしまっているのだろうかと逆に不安になる。一体、いつ、この店は給料代を稼いでいるのか。佐代子は不思議でならない。

そして今、佐代子はもはや仕事だということさえ忘れてしまっている。いつもの暇だった。いつもなら同じアルバイト店員である子たちとお喋りをするのだが、今日はなぜか店長しかいなかった。この店長は頭の毛が少なく、丸眼鏡をかけている、いわゆる中年オヤジである。年頃の女がそんな店長とお喋りをしたいなど思うはずがない。大体、アルバイトである佐代子は店長と話す際、わざわざ敬語まで使わないといけないのだ。そんな面倒臭いことやりたくない。佐代子は重度の面倒臭がり屋だった。

……神様、頼みます。私、今、話す人がいなくて寂しいんですよ。お願いです。今日だけでいいんでお客様呼んでくれませんか？ 佐代子は神様に心から祈りをささげる。別にキリスト教徒ではないけども、神様をお願いするのが一番、効果的だと根拠もなく思ったのだ。

その願いが届いたのか、突如、コンビニの自動ドアの開く音が耳に入ってくる。佐代子は思わずぎょっとして振り返り、ドアの方に顔を向けた。この店に客が来るなんて明日には槍でも降ってくるのではないかと佐代子は一瞬、驚きを隠せなかった。が、すぐに佐代子は、自分の願いを神様が受け取ってくれたのだと思い直す事にした。彼女のモットーは「何事も自分の都合のいいように捉えよう」である。

「いらっしやいませっ！」
いつもより、ハリのある声で軽くお辞儀をする。店長に言われて通り、ちゃんと斜め四十五度まで頭を下げる。そしてゆっくりと顔を上げた。客と同じ視線の高さになり改めて、「初めて自分の勤務中

にきた榮譽あるお客様」として相手の顔や背格好を確認した。そして佐代子の顔は固まった。

なぜかって？それはね、客だと思っていた男が片手に拳銃を持っていたからだよ！しかも銃口を自分に向けているんだぞ！普通、驚くだろ！

佐代子は何が起こったのか把握できなかった。しばらくして頭に浮かんだのは「コンビニ強盗」の文字。うん。なるほど。確かにじつくりと観察すれば、この男はサングラスとマスク、それにニット帽を被って顔を完全に隠している。怪しさ満点だ。その証拠に右手には拳銃。うん。あれだ。これはどう見ても俗に言う強盗犯ファッションだ。

……って何か違う。微妙に違うって！いや確かに客呼んでくれたって頼んだけれども！

神様ああああ！なぜあえてこの人をチョイスしたんだ。生憎、強盗犯はお呼びじゃない。こんなやつが買ってくれるのは私の恐怖心だけじゃないか。っていうか強盗犯さん、よくよく考えたら分かるはずでしょう。客が全然来なすぎるために、赤字コンビニ、略して『赤コン』と呼ばれ、近所の人たちから常に冷たい視線を浴びている。そんな店のレジに大した金入ってないことくらい！狙うなら駅前のコンビニにしてくれよ！

「てって手を挙げるツ！馬鹿な真似はするんじゃないぞ！そしたら絶対撃つからなっつ！」

男に言われた通り、佐代子のため息をつきながら大人しく両手を挙げ、抵抗はしないとアピールする。ただ単に、突然の事過ぎて現実味が湧かなかつたのか、それとも恐怖を感じさせる間がなかったのか。どちらにせよ、佐代子はいたって冷静であった。

「れっレジからお金を出せっ！全部だぞっ！」

男は怒鳴った。先程から何かそわそわしているのが分かる。おそら

く、他に客が来ないか気になるのだろう。客なんて来るはずないから安心して下さっていいですよ。そんなことを思いながら佐代子は黙ってレジからお金を取り出そうとする。

パァンッ

突然、銃声が聞こえた。驚き、振り返れば男が銃口を監視カメラに向けていた。監視カメラを撃つたのだ。それを見て佐代子は思った。遅すぎやしないかと。もうすでに、君の姿は監視カメラに映っているのに。どうせなら店に入る瞬間に破壊すればよかっただろうに。こんなこと言っているとなんだかこの強盗犯に肩入れしているように聞こえるかもしれないがそんなことはない。ただ、無性に同情したくなっただけだ。この男、語尾は震えているし、何よりさっきから舌を噛み過ぎだ。しかも手足がブルブルと小刻みに震えている。これでは緊張しているのが丸分かりだ。男の額からは尋常じゃない汗も流れていた。おそらく、こういった犯罪的な仕事には向いてないのだろうと佐代子は確信した。ストレートに言ってしまうと下手くそなのだ。銃で脅すやり方も、顔の隠し方も、全てにおいて

佐代子はレジから全てのお金を取り出した。札だけじゃなく、小銭もしつかりと。

「よつよし。そつそれじゃ、この袋に全部入れろっ！……ってあれ？ こんだけ？」

男はなんとも間抜けな声を出す。そして確認するように佐代子の顔を見る。

「ええ。それだけですな」

佐代子は哀れんだ目で返す。もう恐怖心など感じていなかった。それどころか、むしろこの男が可哀想に思えてきた。せつかく頑張つて計画立てて、わざわざ乗り込んだというのにこのザマだ。

「…っ！ 店長呼んで来いっ！」

男は苛立った口調で命令する。

佐代子は言われた通り、

「てんちよー！うっ！久しぶりにお客様が来てますよーなんか
あ軽く銃刀法違反してる、強盗には慣れていない初々しさ満点の可
愛いお客様ですよー早く来て下さあーい」

と叫んだ。しまった。本音が出てしまった。わざとだが。
バンッ

銃弾が佐代子の右頬をかすめる。少々、悪ふざけが過ぎたか。そ
う思っているとな案の定、男は侮辱されたといわんばかりに怒りで真
っ赤な顔で怒鳴る。

「てつてめえナメてんのかっつ！」

「あらやだ私ったら本音がついっつかり」

舌を出して手で頭をこつんと軽く叩く。我ながらに気色悪い、と佐
代子は心底思った。

「なにそのわざとらしい演技！というかつつかりじゃねえだろ！ぜ
つたい計算だろっ！」

「……。」

まさか強盗犯がツツコミに出るとは思わなかったのだらう。予想外
の事に佐代子は困惑していた。

数秒間、この状況をどうすべきか考えた末に出た案は

…ここで、もう一度、ポケをかますべきだらうか…。
だった。

佐代子の生まれは大阪である。育ちは東京であったが、やはり、こ
ういう場面に出くわすと大阪人の血が騒ぐ。自分の実力を試させら
れているような気分になった。そしていざ実行しようと試みよう
としたその時

バン！

突然、倉庫の扉が開いた。

「おい！青山君！客が来たつてのはホントかね！」

とびつきり嬉しそうな顔で飛び込んできたのは他ならぬあの禿げ店
長だった。

そついや、店長呼んだんだっけ…。

完全に忘れていた。どうやら強盗犯も同じだったらしい。呼べって言った本人が忘れてどうする。

そんな佐代子の心境を知るはずもない店長はカウンターまで足を運び、男の方を向いて（お世辞にも綺麗だとは言えない）笑みを浮かべた。

「いやいや。これスゴイねっ！今日はお客様初来日記念日だよ！さあさあ！お客様！ご注文は何にしましょう？」

店長。ご注文ってなんですか。ここ、コンビニですよ…？

ふと男の方に目を向ければ、強盗犯は私と同様に、店長のあまりのテンションの高さに戸惑っていた。隙ができた。佐代子そのままこっそりと足音をたてずに男との距離を置く。

ナイス！店長！

佐代子は心の底から喜びの声をあげる。

が、人生はそう上手くいかない。

ツルツ

足が滑った。何に？バナナの皮に、だ。

なんでこんなところにこんな物が…。佐代子のその疑問はすぐに解決した。佐代子の視界の端にいる店長の右手にはバナナが握られている。そう、店長は客が来たという嬉しさのあまり、バナナの皮を落としてしまったのだ。なぜバナナを食べていたのなんて佐代子には知るはずもない。というか勤務中の飲食は禁止って言ったの誰だったかなあー。

いや、どんな理由にせよ、まさかこれが原因で死人が出るなど誰も予想できなかったに違いあるまい。

佐代子は見事にそのバナナの皮で足を滑らせた。

佐代子の体は数秒間だけ宙を舞った。バナナの皮ってこんなにも滑りやすいのか。迷信だと思ってたよ…。ぼんやりとそんなこと考えていた。自分の置かれている状況を完全に把握していなかったのだ。いよいよ、床に着地しようと思った。だが佐代子の体は頭から落ち

ようとしている。姿勢を変えるほどの余裕はない。

ガンッ

床と頭が衝突した。頭に激痛が走る。視界がぼやけてきた。うっすらと映る強盗犯と店長を睨みながら佐代子は瞼を閉じた。

そして二度と佐代子が目覚める事はなかった。

鍋の使い方ですその人の性格が分かる

事件発生の前日

新米教師、佐藤孝雄は悩んでいた。

孝雄はこの春、守沢学園に勤務することとなった。この学校は都内でも進学校として有名だった。簡単にいえばム力つくほど偏差値の高い、いわゆるエリート学校だったということだ。それだけに、無駄にハードルの高い難題が待ち構えていると言っても過言ではない。頭の良い子供は時に厄介で扱いづらい。教師の言葉にいちいち正論をぶつけて反抗してみせたり、頭が良い分、コミュニケーション力が欠けていたり……。その結果、いじめなどに繋がるのだ。学校の評判を下げたくない校長は、そんな問題を起こさせないために経験が豊富な、ベテラン教師ばかりを集めた。しかし、孝雄は教師になつてから一年半とまだ経験が浅い。ベテランと呼ばれるのはまだまだ先のことで、教師経験が短い孝雄は、自分がここでやっていけるかどうか不安で仕方がなかった。のだが、意外にもこれは悩みの原因にはならなかった。予想とは違い、あっさりここでの教師生活に慣れてしまったからだ。

孝雄の見た目はどちらかといえば爽やかな青年タイプ。黒ぶち眼鏡と薄い茶色がかつた短い髪。年齢は二十代後半といったところか。イケメンとは言い難いが、若々しいその外見と裏表のない性格は誰もが憧れており、現に生徒達にも好かれていた。新米としては上々の教師生活を味わっていたそんな矢先、孝雄を悩ませる原因の種がやってきた。

「ふうー」

孝雄は勢いよくため息をついた。目の前には見慣れた自分専用の机。

そしてその上には書類の山。目をそらしたいがどうしても視界に入ってしまう。

「あらやだ。そんなため息ついてると幸せ逃げるわよー?」

そう言つて孝雄の肩を軽く叩き、小さく笑いながら声をかけてきたのは孝雄より五つ年上の女教師だ。さすがに新米教師である孝雄も彼女の顔と名前は覚えていた。この女はわが校では珍しく顔立ちが整っており、いわゆる美人教師で有名だったのである。性格は朗らかで何事にも屈しない勇気あるその姿は生徒にも教師にも人気だった。

「なにか悩みごとでもあるの?もしかしてこの書類が原因?」

女教師はにっこりと優しく微笑みながら訊ねてきた。孝雄は正直、疲れていたためこの女教師を相手にしたくなかったが、その、女子高生を思わせるような屈託のない笑顔を見るとなぜだか素直に口を利いてしまう。

「……ええまあ。この書類が原因つちやあ原因なんですけど……。」
孝雄は言葉を濁しながら眉間に皺を寄せる。それでも女教師は笑顔を崩す事もなく耳を傾ける。

「へえ。じゃあその書類になにか面倒事が書いてあつたのね?」

と女教師が訊ねようとした時、突如、「南せんせい!二組の良子ちゃんが呼んでるよー」と一人の女子生徒が職員室のドアの前に現れた。南というのはこの女教師の苗字である。

「あつはーい。今行くわ。…あつごめんなさい、佐藤先生!お悩みの相談聞いてあげられなくなつたみたい……。」

女教師は申し訳なさそうに小さく手を合わせて頭を下げた。その動作はどこか優雅で、映画のワンシーンのように見える。これだから顔が良い人は得だよな、と孝雄は心の中で呟く。孝雄はこれ以上、この美人な女教師を咎める気にはなれなかった。

「いえ、別にお気になさらず。」

と、孝雄が口に出そうとするが、それより先に女教師が口を開き、「あっそうだ。社会の吉崎先生ー?今、お時間空いてます?よかつ

たら佐藤先生のお悩み、聞いてあげてくれない？」

と隣に座っている猫背の男に訊ねた。孝雄は思わず顔をしかめる。おそらく、孝雄のためにそう言ったのだろう。それは十分理解できる。だが孝雄にとっては有難迷惑だった。なぜなら吉崎は孝雄の「苦手な職場の人間ベスト3」に入っている人間だからである。

新米教師がそんなことぐちゃぐちゃ言える身分じゃないだろう、と思うかもしれないが初めて会ってから半年も経たないうちに孝雄に嫌われる吉崎も吉崎なのだ。孝雄が自分の事を嫌っているのも承知でこの女教師の頼みを引き受ける彼にも非はある。と、孝雄は自分に言い聞かせる。

「そんなあからさまに嫌そうな顔をするな。傷つくだろう」

数学教師が職員室を出ていってから、吉崎はそう言った。片手にコ―ヒーカップを持って足を組む姿は、私はあなたよりも先輩なんですよ、と宣言しているように思え、苛立ちが増す。

「よく言いますね。めちゃくちや楽しそうな顔してるじゃないですか。」

孝雄はじとつとした目で吉崎を睨んだ。すると吉崎は腹を抱えて笑いだす。この人とはどうも気が合わないな、と孝雄は改めて実感する。

「で？・・・南先生が言うには何か悩みがあるらしいじゃないか。さあ、私に相談してみろ」

なんで偉そうなんだ、という疑問は心の中にしまって、渋々、吉崎に悩みを打ち明けた。

「なるほど？鍋田鍋子という生徒のことで悩んでるのか。」
吉崎は納得したように頷く。自分の悩み事を熱心に聞いている姿には（不本意だが）感心した。

「正直、初めてその名前を聞いた時、偽名かと思いました。」
孝雄は悪びれることもなく、素直に彼女の名前を知った時の感想を

言う。

「まあ……珍しいよな、こういう名前。俺も最初びっくりしたよ」
吉崎がまさか同意してくるとは思わなかったので、孝雄は思わず動揺してしまふ。なんとか話を切り替えようと新しい話題を持ちこんだ。

「……吉崎先生はご存じなんですか？この生徒のこと。」
そう訊ねれば、

「……知らない奴はそうそういない。この生徒は変わってるからな」と吉崎は答えた。吉崎はさつきからうちわで顔を仰いでいる。孝雄も額の汗をハンカチで拭う。春なのに暑い。なんて恐ろしいんだ、温暖化現象は。それとも単に職員室の室温が高いだけなのだろうか。

「……どこら辺が？」
孝雄はさらに訊ねる。

「成績は中の上。まあまあだな。生活態度も良好。俺達、教師にもちゃんと敬語を使うし、礼儀がなっている。何より愛想がいい。クラスメイトとも仲が良いし……。でもだからと言って別段目立つ奴でもない。ごくごく普通の生徒だ。ただ……」

吉崎は、これに合った言葉が見つからないとでもいったふう言葉詰まらせる。

「ただ？」

孝雄は先を促す。しばらく思索するような顔で天井を見つめていた吉崎は、ふいにこう答えた。

「鍋を被っている」

そのあまりにも淡々とした言葉に孝雄は二の句が継げない。

「鍋って被るもんじゃないですよね……？」

ようやくなんとか口を開いた孝雄。

「当たり前だろう。」

「……それが問題になってるんですか？」

「ああ。あいつは授業中だろうと休み時間だろうと関係なく鍋を被っている。そうしないと落ち着かないんだとかなんだとかで。この

前は、水泳の時間に鍋を被ったままプールに入って危うく溺死するところだったそうさ。」

「……はあ。」

なんだかこの生徒には関わらないほうがいいような気がしてきた。

「で、それで一度、校長に訊いてみたんだ。どうして四六時中、彼女は鍋を被っているのか。本当の理由を教えてくれ、と。校長はこう言ったよ。いつもと変わらない仏頂面で。『あの子は父子家庭でな。小学校一年生の時に母親が出ていったんだ。彼女の大好きだった鍋料理作り置きしといて。というよりも母親は鍋料理しかできなかったんだな。そんな駄目な母親でも彼女にとっては立派な母だったんだよ。……幼い時はよく鍋を被って遊んでいたみたいだね。それを母親がいつも止めて鍋を取ってくれてたらしい。危ないから、と。もしかしたらまだ待ってるんじゃないかね。自分の母親が頭から鍋を取ってくれるのを。昔のように危ないと叱りに戻ってくれるんじゃないかってね。……頭は良い子だからそんなことしても無駄だってことは分かってるんだろうけどね。でも何かをして気を紛らわせないと、孤独で押しつぶされてしまいそうだった。そうでもない」と心が折れてしまう。それがどんなに滑稽だとしてもさ、彼女にとってはその方法しかなかったんだからさ』ってさ……。泣ける話だろう？」

言い終えたと思えば吉崎は本当に泣き出した。孝雄は一瞬たじろいだが、つっこまずにはいられなかった。

「なんで泣いてるんですか！どこに感動する要素あったんですか！こんなの全部嘘に決まってるでしょ！」

孝雄はここが職員室だということも忘れ、思わず怒鳴ってしまった。それに対し、吉崎は顔を上げ、孝雄に視線を合わせ、こう言い返した。

「ああ？嘘？んなわけないだろう！あの禿げが俺に嘘つくわけない！」

自信満々に言い張る吉崎に嫌気がさす。しかし、ここで言い負か

されるのも癪なので孝雄はさらに声を張り上げる。

「どこから出てくるんですか！そんな自信！しかもアンタ校長を『あの禿げ』って言ったよね今！」

他の教師達の視線が痛いほど突き刺さったがそんなことを気にしている余裕もなかった。

二人でしばらくそんなふうにならぶに怒鳴り合っていると、突如、教頭の咳ばらいが背後から聞こえてきた。

教頭は丸眼鏡をかけた四十代後半のベテラン教師だった。この守沢学園には二十年以上勤務している。どちらかといえば厳しく、気味が悪いほど几帳面な性格の人で、笑っているところは見た事がない。この人の周りにはいつも緊迫した雰囲気が付きまとっているようにも思えた。

「……吉崎君。佐藤君。ここは職員室だからね。ケンカをやりたくないならグラウンドでやってきて」

冷たいその声に思わず孝雄は身震いする。しかし吉崎は慣れた様子で「すみません」と謝罪した。孝雄も慌てて頭を下げる。教頭が離れたところまで行ったのを確認するとまた小声で話し合う。

「……おい、佐藤。校長が嘘ついたって言うのなら証拠を見せる。」
命令形なのが気に入らないが、彼の方が年上だから仕方がない。

孝雄は自分の机の書類を持ち出し、吉崎の前に見せる。

「……これはなんだ？」

「……鍋田鍋子の資料ですよ。」

「は？」

なんでお前がそんなものを持つてるんだ、とでも言うように訝しげにこちらを見つめてくる。

「これ、よく見てくださいよ。ほら、父子家庭じゃないですよ。5人家族ですよ。母親もちゃんといますよ。」

孝雄はそういつて書類を吉崎の顔に押し付けた。

「……なんだって！……」

吉崎は驚きを隠せないともいうように目を丸くする。その大げさなりアクションを見ていると、この人が自分の先輩だという事実を抹消したい衝動に駆られた。そんな馬鹿げた話が事実な訳ないだろ！

*

孝雄は今年、鍋子のクラスの副担任をしていたが、担任の山之先生が結婚するということで、しばらくの間、孝雄がこのクラスの面倒を見ることになった。孝雄自身、まさかこれが後に自分の人生を狂わせることになるとは思いつかなかった。ただ、校長からこの話を聞かされた時、急に校長室に呼び出され、何か問題でも起こしたのだろうか、とびくびく怯えていたものだから、この話を聞いて思わず安心してしまい、「なんだ、そんなことか。」と、つい深く考えずに「いいですよ」と了承してしまったのだ。

孝雄はまだ、楽勝だと高をくくっていたのだが、やはり難題は多かった。副担任といえども、自分のクラスの生徒たちと触れ合う機会は少なく、名前すら覚えていない状態だった。あれ、俺、B組とA組どっち担当だっけ？と自分のクラスさえも迷うときもしばしばある。そして、何より、自分のクラスには、あの「鍋田鍋子」がいるのだ。実際、今まで孝雄は彼女と接触したことは一度もない。生徒証の顔写真や、ある程度の個人情報入手していたが、会って話すらもしたことのない女子生徒の存在は現実味がなかった。(といより、そんな変人が自分のクラスにいることを認めたくなかった。)第一、どこに鍋を被って登校してくる馬鹿な奴がいるんだ、と悪態をつきながら、重い足をひきずって自分のクラスへと向かった。

教室のドアを開ける。お喋りをしていた生徒たちの視線が一斉に集まる。緊迫した空気が流れた。それでも孝雄は落ち着き払った様子で教壇の前まで足を進め、生徒たちの前で自己紹介を始めた。愛想笑いもせず、無表情で、だ。感じが悪いと思われるかもしれない

が下手な愛想笑いをするより、こっちのほうが幾分かマシだと考えていた。

「えー。今回、このクラスの担任である山之先生が結婚とかでしばらく、学校をお休みなさるので、副担任の俺が代わりを務める事になりました。佐藤孝雄です。よろしくお願いします。」

小さくお辞儀をした。顔を上げて教室内を見渡す。生徒一人一人の様子を窺いながら今後の予定などを説明した。自分のクラスの教壇に立ってみた感想は「ああ、無理だな」だった。それは生徒たちの態度に対してとかさういったことではなかった。むしろ自分に向けた言葉だった。

……だつて、皆同じ顔に見える。思わず、「無理」なんてマイナスの言葉が頭に浮かんだのは仕方がない。そりゃ、男女くらいの区別はつくけれど、この子ら一人一人の名前と顔を覚えるなんて無茶だ。記憶力に乏しい自分がそんな難題を簡単にクリアできるとは思えなかった。

「……あの先生知ってる?」「ううん。知らない」「ってかオレらのクラスに副担任いたんだなー!」「ホントだよね」「でもあの先生なかなか人気らしいよ?」「えーマジで?」

生徒たちの会話が次々と耳に入ってくる。

そういえば、あの噂の鍋田はどこなのかと座席表で探してみる。新米教師である自分を悩ませているあの生徒はどこに座っているのかと。……あつた。窓際が一番後ろの席だ。隅の方だが、漫画などを読んでいてもバレにくいと生徒に評判の席だった。さっそく、鍋田の顔を見てみると、その席を探したが、そこは空席だった。どうやら鍋田は今日、欠席しているらしい。

「あつそーだ。せんせーい? なつちゃんはねえー2時間目から来るつてさつき連絡あつたよー」

比較的、明るくて積極的な女子が答えてくれた。名前は青山佐代子か。ふむふむ、なるほど。

そんなふうに頑張って覚えようとはするものの、きつと2分後には
確実に忘れていた。という確信があった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6890y/>

世界は馬鹿中心で回ってる

2011年11月20日20時24分発行